

## 第2 教育研究団体の意見・評価

### ① 日本地理教育学会

(代表者 池 俊介 会員数 約500人)

T E L 042-329-7729

#### 1 前 文

追・再試験の問題数は30問で、穀物の生産と消費(4問)、地域調査(4問)、世界の自然環境と自然災害(6問)、世界の資源と産業(6問)、都市と都市問題(5問)、北アメリカと中央アメリカ(5問)の大問より構成されている。標準的な問題が多いが、難易度がやや高めの問題も見られる。学習指導要領の内容との関連を見ると、「地理総合」のB「(1)生活文化の多様性と国際理解」,「(2)地球的課題と国際協力」,C「(1)自然環境と防災」,「(2)生活圏の調査と地域の展望」,「地理探究」のA「(1)自然環境」,「(2)資源、産業」,「(4)人口、都市・村落」,「(5)生活文化、民族・宗教」, B「(2)現代世界の諸地域」, C「(1)持続可能な国土像の探究」からの出題であった。大学入試センターでは、問題作成方針に関する三つの基本的な考え方,①「(略)知識・技能や思考力、判断力、表現力等を問う」,②「学習の過程を重視」する,③「多様な入学志願者の学力を適切に評価する」ことが示されているが,①については、地図を使った問題が14問、グラフを使った問題が12問、表や写真を使った問題が8問で(重複あり)、図表を複数用いて解答させる問題も7問あり、図表を用いずに解答させる問題は見られなかった。このことより、知識・技能や思考力・判断力・表現力等を問うことは重視されているといえる。②については、第5問で高校生が探究活動を行う設定で出題され、資料を使った比較、表や主題図の作成、グラフの作成と考察、地図を使った教員と生徒の会話といった場面を取り入れている。③については、特に地図や写真の見やすさが問題となるが、この点は総評で述べる。

#### 2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価への評価

第1問 生活文化の多様性と国際理解並びに、地球的課題と国際協力に関する大問である。試作問題と比較すると、資料から読み取った事柄をもとに既有知識を結び付けて考察する問題ではなく、知識を問う問題が多い印象を受けた。また、大問全体を通しての問い設定や生徒の探究場面を想定した出題は見られず、各問題が独立している印象も受けた。加えて、世界全体や地域における事象の傾向性や課題相互の関係性、国際理解や持続可能な社会づくりのための解決策についての問題は見られなかった。これらは「地理総合」における要の部分でもあるので、次年度以降は是非出題していただきたい。

問1 三大穀物の生産量に対する輸出量の比率と輸出元地域とその割合について問われた問題である。それぞれの穀物が主にどこで栽培されているのか、どこで消費されているのかに関する知識が問われている。

問2 世界の4地点で見られる米を用いた特徴的な料理がどの地点で見られるのかについて問われた問題である。自然環境や宗教などによってもたらされた食文化に関する知識が問われている。

問3 エジプトとチャドで栽培されている農作物と栽培方法について問われた問題である。エジプトは、ほぼ乾燥地域でありナイル川の水を用いた灌漑で小麦の栽培を、チャドは天水でもろこしを栽培しているという知識が問われている。図や文章が思考するためのヒントとは

なっており、細かい知識が問われているという印象を受ける。

問4 三大穀物と大豆の収穫面積と1ha当たりの収量の変化について問われた問題である。②③は図3から読み取れること、①④は読み取った事柄がなぜ起こるのかについての要因について問うている。②③に関しては図を読み取る技能を、①④に関しては既有知識を要因と結び付ける思考力が求められている。

第2問 愛媛県今治市の地域調査に関する大問である。「地理総合」の柱の一つである「持続可能な地域づくりと私たち」の「生活圏の調査と地域の展望」の内容に相当する。生活圏の地理的課題について生活圏内・外との結び付き、地域の成り立ちや変容などに着目して主題を設定し、課題解決に求められる取り組みなどを多面的に考察、表現する力が求められる。従来の『地理A』『地理B』の地域調査と比べると小問の数は減り、難易度も高くない。

問1 写真の撮影方向を地形図上から選ぶ問いである。2021年度の共通テストの第5問の地域調査でも同様の問題が出題された。目印となる大橋の方向を読み取ることができれば、解答は容易である。

問2 本州四国連絡橋の開通に伴う移動交通手段の変遷に関する問いである。本州と四国との位置関係、結び付きを考えなければならないが、愛媛県と徳島県は判断に迷い、時間を要する。共通テストらしい組合せ問題であり、良問である。

問3 愛媛県内の産業構造を階級区分図で比較する問いである。松山市の位置も示してあるため解答には時間もかからず、難易度は低い。

問4 今治市の地場産業に関する問いである。タオルの生産量や事業所数、国内に占める今治産の割合や輸入品の割合の推移を表す複数のグラフが示されている。これらを参考に高校生の会話文を読み、ふさわしい内容の組合せを選ぶ共通テストらしい問題である。主題の設定としては良いと思うが、地理の知識がなくても一般教養で解くことができる。正直、図を見なくても解答可能と思われるため、もう一工夫欲しいところである。

第3問 世界の自然環境と自然災害に関する大問である。全問とも基本的な知識と図表を用いて思考する問いとなっている。この大問では、基本的な知識を用いて初見の図表を読み解く問いが多く、全体的にやや難問といえる。

問1 世界地図に示された四つの地域について、海溝型巨大地震と氷河湖やモレーンの両方の影響が見られる地域を選ぶ問いである。二つ当てはまるものを一つ一つ検討する必要があるが、各地域の自然環境と自然災害を結び付けて押さえしていれば解答できる。標準的な問いである。

問2 1990年以降最大規模の噴火の影響に関する事柄について述べた説明文の正誤を判別する問いである。図中の4地域についての噴火の影響について国名が特定できても、やや詳細な噴火の影響について押さえないと、解答に戸惑うかもしれない。やや難問である。

問3 南米大陸南部の気候は、アンデス山脈を境に偏西風の風上となる西部（太平洋側）は乾燥し、チリの首都であるサンティアゴは代表的な南半球の地中海性気候であることは基本事項として習得している受験者が多いと思われる。しかし、図4で三つの都市群F～Hの降水に関する指標を、タテ軸の最暖月降水量とヨコ軸の最寒月降水量から判別することに戸惑った受験者もいるかもしれないが、チリ周辺が典型的な最暖月に降水量が少ない地中海性気候であることを手掛かりとして解答できる。標準的な問いである。

問4 オーストラリアにおける2010年に発生した林野火災の時期（1月か7月か）とその事柄について述べた文章の組合せを選ぶ問いである。オーストラリアの林野火災は、乾燥している1月に多いこと、熱帯収束帯が北上しサバナ気候が見られる図5中のKの北部は乾季のた

め林野火災が多いこと、オーストラリア大陸の内部は広範囲で乾燥帯（BW・BS）が分布していることを押さえていれば、正解にたどり着ける。標準的な問いである。

問5 1991～2020年の北極の海氷面積、東京の気温、ハワイの二酸化炭素濃度の月平均値の推移を判別する問いである。初見の図で戸惑った受験者も多かったかもしれない。シのグラフだけが上昇傾向にあるため、世界的に上昇が懸念される二酸化炭素濃度ということは判別しやすい。上昇・下降が激しいサのグラフが東京の気温、徐々に上下の幅が大きくなっているスが北極の海氷面積と落ち着いて考えれば正解にたどり着けるが、時間を要するかもしれない。難問である。

問6 日本における国土像を考察する上で、市街地化が進行した丘陵地の変化と、それに伴う災害の危険性を検討する新課程の内容を踏まえた問いである。「切土地」「盛土地」の基本的な理解を地図や説明文から問うている。「切土地」「盛土地」の用語の意味と、日頃からこの地形が地形図でどのように表現されるのか、読図に慣れていないと時間を要し、解答は難しかったかもしれない。やや難問である。

第4問 世界の資源と産業に関する問題で、地理探究の中項目「資源、産業」の範囲から出題されている。図表の読み取りを通じて、地理的思考力を問う問題となっている。問6の図5は目新しい図であるが、他の問いで用いられている図表は従前の試験でも見られた形式である。多面的・多角的な考察が求められる問題が多く、地理的思考力を問う姿勢が見られる。しかし、問1～3は第一次産業、問4は直接投資や出稼ぎによる送金、問5は第三次産業、問6は日本の工業という内容構成で、第二次産業(特に鉱業)を問う要素が乏しく、出題範囲に偏りが見られる。また、本試験ではウェーバーの工業立地論について考える問題が見られたが、この追・再試では理論を用いて考える問題の出題が見られなかった。2021年度では、本試験『地理B』の第2問にてウェーバーの工業立地論について考える問題が、追・再試『地理B』の第2問にて付け値地代直線について考える問題があったことから、本年は本試験と追・再試のバランスについて考慮されていなかったと思われる。全体として標準的な難易度に設定されている。

問1 農業の生産性に関する問題。それぞれの地域の農業の特徴を踏まえた上で、労働生産性と土地生産性を示した図を読み取り、正しい文を選ぶ2段階構成の問題。標準的な難易度ではあるが、受験者にとって解答するのに時間を要したと考えられる。

問2 アメリカ合衆国、ナイジェリア、フランスの穀物消費量の用途別割合に関する問題。飼料および燃料としての用途からトウモロコシを判定し、用途別割合からそれぞれの国を判定する2段階構成の問題。バイオエタノールについての知識があれば後半は容易に判定しやすく、出題方法にもう一工夫欲しい。難易度はやや易しめである。

問3 木材の伐採量・輸出量・輸入量を、表の読み取りから判定する問題。これまでに、農産物や鉱産資源の生産量・輸出量・輸入量について、図形表現図で表現した主題図で問うことが多かったが、本問では表で示している。中国やアメリカ合衆国での需要や、ロシアやカナダの自然環境を考慮していれば解ける問題であり、やや易しめの問題である。

問4 直接投資の受入額および出稼ぎ者からの送金額という、受験者にとってなじみの薄い用語が並び、解答に戸惑った受験者も多かったと思われる。図中で例示されている中国とインドから直接投資と出稼ぎ者からの送金額を判定し、前半で判定できた指標をもとにフィリピンとロシアを判定する問題。図の下に統計年次が2019年と示されているが、ウクライナ紛争に伴うロシアへの経済制裁を考える受験者も多かったのではと思われる。近年の世界情勢を踏まえた上での出題を考慮していただきたい。難しめの問題である。

問5 日本のサービス業の立地割合に関する問題。インターネット関連サービス業と研究開発

事業について、注に記載されているコンテンツ産業から考えることで判定できたと思われるが、解答に時間を要したと考えられる。やや難しめの問題である。

問6 高速道路沿線の工業出荷額の変遷から、業種を判定する問題。従前の試験には見られない図ではあるが、日本の工業の地域性と変遷を理解していれば解ける問題であり、やや易しめの問題である。日本の工業の変遷について、多角的な観点から捉えており良問である。

第5問 都市に関する大問である。都市の規模や機能の違いと、それがもたらす課題に対して、高校生が探究活動を行う想定で作問がなされているが、それぞれの問いは独立しているため、比較的取り組みやすかったと考えられる。中には都市地理学研究の内容が反映されている問いも見られ、教員側からみると、ある程度の専門的な知識を有しているかどうかなど、教員の技量も若干関わっており、受験者にとって少し差がつきやすい問題も幾つか見られた。

問1 日本、アメリカ合衆国、インドネシアにおける都市の規模を比較しながら考える問題である。ジャカルタがプライメートシティであること、日本とアメリカ合衆国が都市のランクサイズルールに則っており、特に日本は東京大都市圏へ人口集中していることが理解できていれば解答できる。難易度は標準的であるが、受験者にとって差がつく問題であったと思われる。

問2 都市の機能について、日本の四つの都市における大企業の本社数と支所数を比較して判断する問題である。既に表に挙がっている東京都区部や札幌市を手掛かりにすれば解答が可能であり、難易度も標準的であるが、問1と同様に、受験者にとって差がつく問題であったといえよう。細かい指摘ではあるが、問題文中では「大阪市、名古屋市、福岡市、横浜市」と、都市の中心性が高い順になっているため、この並びを入れ替えるなどの工夫が必要ではなかろうか。

問3 東京都とその周辺の市区町村における住宅に関する三つの主題図を考察する問題である。東京都心部の位置が分かれば、共同住宅や持ち家戸建て住宅の戸数が容易に判断できる。難易度は標準的で、幾つかの地理的見方・考え方を働かせながら解答する問題となっており、良問といえる。

問4 長野県の人口動態に関するグラフを見て、その背景や影響に関する説明文の正誤を判断する問題である。総人口に対して社会増減だけでなく自然増減にも着目しなければならないことが分かっているれば、容易に解答することができる。判断に迷うような下線部もなく、難易度はやや低い。

問5 フランスとドイツの都市システムを比較する問題である。図から両国における都市機能の集中と分散の差異が対照的であることを容易に読み取れるため、考えられる都市問題も捉えやすく、難易度は低い。全体的な問題の難易度を考慮に入れる必要があるものの、探究活動を想定した問題であるならば、複数の資料を提示して多角的に考察させる工夫があっても良かった。

第6問 北アメリカと中央アメリカに関する問題である。年降水量の判定、景観写真や各種データを使った図表の判定など、地理の基本的な出題形式で構成されていたが、受験者にとっては、設問の一部に見慣れないテーマでの出題も見られ、難易度はやや高かったのではないかと。

問1 北アメリカから中央アメリカの各地点の面的な降水量を判定させる問題。ケッペンの気候区分などを正確に理解した上で、地形的な特徴を捉える必要があるが、難易度は標準的といえる。

問2 アメリカ合衆国と、カナダ、メキシコ国境付近の特徴から、正誤判定をさせる問題。カナダとの国境が直線になっている理由を理解できていれば、判定は容易だったと思われる。



問3 中央アメリカに位置する各国の指標をもとに、データの種類の判定させる問題。人種・民族構成などについてはこの地域を理解する上で基本的なデータといえるが、それ以外の指標については、それぞれの国の特徴をある程度、理解する必要があるため、難易度は比較的高かったのではないかと。

問4 USMCAの3か国における各産業の輸出総額の推移を読み取らせる問題。あらかじめカナダの指標が提示されているため、それを基に二つの国を判定できれば、解答は導けたと思われる。難易度は標準的だった。

問5 カナダ、キューバ、メキシコの旅行者の動向について問う設問。この3か国の経済水準や各国との歴史的な経緯なども理解した上で判定させる良問であるが、受験者にとってはやや難しく感じたのではないかと。

### 3 総評・まとめ

出題形式としては、地図・表・グラフがどの指標・国を示したものかを問う問題が最も多く、次に地図や写真と説明文を対応させて正誤を判断する問題、地図上の位置を問う問題が多く見られ、全体として組合せ問題が7割を占めている。第1問は、穀物の生産と消費について、図から読み取らせる問題も見られるが、多くは知識を問う問題で、難易度は標準的である。第2問は、地域調査について、本州と四国との位置関係や結び付きを踏まえて架橋後の交通流の変化を判断させる問題や、階級区分図から愛媛県の産業の特色を読み取らせる問題、今治市の地場産業の動向と課題を解答させる問題などがあり、難易度はやや低い。一方、第3問は、世界の自然環境と自然災害について、初見の地図やグラフを読み解く知識・技能が求められているとともに、教科書に記述の少ない内容についての問題もあり、難易度はやや高い。第4問は、世界の資源と産業について、地図やグラフ、表をもとにどの指標・国を示したものかを問う組合せ問題で、難易度は標準的である。第5問は、都市の規模や機能の違いと、それがもたらす課題について、高校生が探究活動を行う設定で出題され、全体的に難易度は標準的であるが、やや難易度の高い問題が見られる。第6問は、北アメリカと中央アメリカについて、年降水量の月別変化のグラフからケッペンの気候区分や地形を踏まえて地図上の位置を解答する問題、景観写真から正誤判定する問題、各国の複数の指標をもとに指標を判断する問題などがあり、地理の出題形式としてはよく見られるが、受験者には初出の内容も見られ、難易度はやや高い。地理では、地理的な見方・考え方を働かせて、地理に関わる事象の意味や意義、特色や相互の関連を多面的・多角的に考察させることを重視している。大学入試センターの問題作成方針の三つの基本的な考え方の①にも示されているが、この試験では、地図を用いて位置や分布を踏まえて解答する問題が各大問でまんべんなく出され、特色や相互の関連、要因について問う問題も見られる。また、図表を用いて、地域の変化や地域間の関係性を問う問題も出されている。②については、第5問で高校生が探究活動を行う設定で、各小問で様々な場面を想定して出題されているが、学習の過程を重視するという大学入試センターの出題方針に鑑みると、各小問のつながりが必要である。③については、地図や写真の濃淡が毎回話題となっているが、この試験では、第2問の問1について、写真の濃淡だけでなく、解答の目印となる来島海峡大橋が見やすいサイズでも検討いただきたい。

### 4 今後の共通テストへの要望

今後に向けて要望したいことを、以下4点指摘しておく。第一は、今後とも出題分野に偏りがないうように、近年の世界情勢を踏まえた出題に配慮していただきたい。第二は、大学入試センターの問題作成方針の三つの基本的な考え方の①について、知識・技能と思考力・判断力・表現力等をバラ

ンス良く問う出題を求めたい。追・再試では、図表を利用して解答させる問題の中に、図表の読み取りとは関係なく解答できる問題や、図表や説明文が思考のためのヒントにならず、詳細な知識が問われている問題が見られた。また、特に探究場面を想定した問題では、複数の資料を提示して多角的に考察させる問題をもう少し取り入れていただきたい。第三は、問題作成方針の三つの基本的な考え方の②についてで、社会的問題や地球的課題についての出題は見られたが、それらの解決につながることを意図している問題や探究の方法についての問題を加えていただきたい。第四は、③について、地理は図表を用いた出題が多いため、地図や写真の濃淡やコントラスト、サイズにおいて、様々な受験者に配慮する必要がある。細心の注意を払っていただきたい。今後とも地道に学習に取り組んできた受験者の成果が現れるような出題を期待したい。

## ② 全国地理教育研究会

(代表者 高橋 基之 会員数 約300人)

T E L 03-5802-0201

### 1 前 文

本試験と比較して『地理総合、地理探究』も「地理総合」も難易度が高くなったと思われる。追・再試験の『地理総合、地理探究』が本試験での出題であれば、55点程度であった可能性もあるのではないだろうか。難易度の調整は慎重にお願いしたい。

全体としては、これまでのセンター試験や共通テスト同様、高等学校までの学習内容におおむね沿った問いが圧倒的に多く、学習範囲を逸脱した難問や奇問は見られなかった。また、詳細な事項を前提とするような問いも少なく、ほとんどの小問は、高等学校までの学習で身に付けた基礎的な事項をもとに、地理的技能や見方・考え方を用いて考察するものであったが、『地理総合、地理探究』では解答に時間を要し正解率も低いであろう問いが数問見られた。

### 2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

追・再試験で出題された大問構成と内容は、第1問「地球的課題（食料問題）」、第2問「地域調査（愛媛県今治市）」、第3問「自然環境」、第4問「産業」、第5問「都市」、第6問「地誌（北中アメリカ）」であり、基本的な枠組みは本試験と大きく変わらなかった。

本試験では、試作問題において見られた「持続可能な国土像」についての大問や、課題解決に向けて構想する力を問う小問も見られなかった。追・再試験では、設問文中に「日本の国土像」との言葉は見られたが、その内容を丁寧に問うものではなかった。持続可能な国土像や課題解決に向けて構想する力は、新課程における大きな特徴の一つであり、来年度以降の積極的な作問を期待したい。

組合せ選択の問いは、8択はなかったものの、本試験よりも更に多い21問を数え、解答数の7割に達した。組合せ選択の問いは、一つの問いの中で二つの内容について判断するものが多い。そうした問いで解答に多くの時間を要したと考えられる。四つの文または下線部の中から適当あるいは不適当なものを一つ選ぶものは5問と少なく、各下線部の正誤をそれぞれに求めるものは見られなかった。

第1問 「穀物の生産や消費」 本試験と同様に「地球的課題と国際協力」の大問が食料問題について問われたが、出題の対象範囲は穀物に限定された。「地理総合」では、第4問の問1、問3においても食料に関する内容が扱われており、全体に対する配点について再考をお願いしたい。

問1 三大穀物の輸出に関する易問。資料もコンパクトで、最初の問いとしては問い方や難易度的にも適切だった。

問2 4地点の料理に関するもので、米とココナッツミルクでインドネシアを判別でき易問。写真も判別しやすく、説明があるのも良かった。各地の食文化について問うオーソドックスな問い。

問3 アフリカ大陸に位置する2か国の穀物栽培に関する問い。xのナイル川による灌漑については容易に解答できるが、灌漑など栽培技術が伴わないyでは雑穀の割合が高いことについても問うており、易問ではなく標準的な難易度。チャドが出題対象になったことや、モロコシ（ソルガム）や天水田という言葉が出てきたことに戸惑った受験者も

いたのではないか。

問4 グラフの読み取りと作物に関する知識から判断できる易問。図3は授業で用いても、様々な読み取りができそうだとの声があった。

第2問 「愛媛県今治市の地域調査」 「生活圏の調査と地域の展望」からの出題。地形図や地理院地図を含めた様々な資料を読み取りながら思考判断していく構成は、本試験と同様であった。また、問1において地理院地図の読み取りが出題された点も同様であった。各問それぞれに多数の資料が用意され、それらの資料を読み取り判断するに当たって時間を要するものが多かった点も、本試験と同様であった。問数が4問であり、昨年度までの地域調査の大問と比較すれば解答時間への圧迫は軽減されている。

問1 地理院地図に示された撮影地点を写真から判別する定番の問いで、地点Aが問われていたことで難易度は低かった。一方で、その他の地点を判別するための写真に写り込んでいる構造物や対岸の陸や島がどれもかなり遠方で見づらいため、その点については修正をお願いしたい。

問2 本州と四国を結ぶ連絡橋の交通流動に当たる影響についての問い。表中の人数の少なさから高知県の判別は容易である。一方で、愛媛県と徳島県については判別が困難である。作問者は、愛媛県の幹線旅客船利用者が元来多かった要因は、広島・愛媛県の方が内海である瀬戸内海を利用した人の動きが盛んだったと類推するか、徳島県の幹線バスの利用者の増加率が高い要因は、大都市圏である大阪や神戸からのバス路線が充実したためと類推することにより正解へと至ることができると考えたのだろうか。陸路の開通時期や、香川県は明かされていたが、そこから3県を見分ける汎用性のあるロジックを見出すのは困難である。

問3 三つの指標についての愛媛県内の市町村別階級区分図を判別する問い。共通テストでは定番の問い方で、難易度は標準的。問1と並んで、典型的な問いとして学習場面での利用に適している。

問4 今治市の地場産業に関する問いで、Qに当てはまる語句は容易に選択できる。一方で、Pに当てはまる語句に関しては、「中小企業によって産地が形成」との文から生産設備の大型化と結び付けねばならず、総合して難易度は標準的。

第3問 「世界の自然環境と自然災害」 自然環境の大問において近年の共通テストではあまり用いられていない世界図が、本試験よりも多く、問1～3の3問連続で出題された。自然環境を理解するに当たって、世界を大観させることは重要であり、こうした問いが数多く作成されたことは評価したい。一方で、災害との関連が見られない問いは、問3の気候に関するもののみで、自然環境と人間生活とのつながりを、ほとんどの問いにおいて災害や防災面でのつながりからのみ扱っている点は評価し難い。本試験でも指摘したように、地理において地形や気候を学習する意味を考えれば、自然環境と人間生活との関連に踏み込んだ作成も積極的になされることを期待したい。難易度については、これも本試験同様に、全体的に難易度が高い大問となっており、来年度からの改善を求めたい。

問1 世界図に示された4地域について、海溝型地震と氷河地形がどちらも見られるものを選択する問いで標準的な難易度。

問2 世界図に示された4地点の火山について、火山災害の影響が及ぶ時間スケールが問われた。作問の視点はユニークで評価したい。標準的な難易度。

問3 世界図に示された6地点の降水パターンについて考察する問い。同じ気候区分に属す地点を北半球と南半球でそれぞれ図示していた点がやや難易度を上げたと思われるが、



気候学習のまとめに用いられそうな仕上りの問いである。

問4 オーストラリアの林野火災を題材に、熱帯収束帯の季節的移動とオーストラリア内陸の気候の特色について問うもので、難易度は標準的である。

問5 受験者にとっては初見の資料となる、北極の海水面積、東京の気温、ハワイの二酸化炭素濃度という三つの指標の月平均値の推移の仕方としてふさわしいものを判別する問い。全体を概観するだけでなく、数値の山や谷がどの季節にできるのかや、数値の波の高さの違いなどへの細やかな分析が必要であり、自然環境に関する様々な観点からの考察を促す良問ではあるが、解答に時間を要し、難易度も高い。

問6 丘陵地の宅地造成による地形変化についての問い。題材は典型的なものであるが、地形図の読み取りを含んでおり、地理らしい問いとなっている。標準的な難易度。

第4問 「世界の資源と産業エネルギーと産業」 「地理総合」との共通問題となる第1問が穀物をテーマとしており、第4問においても、農業に関連した問いが2問、林業についても更に1問出題されるなど、第一次産業への偏りが否めない。本試験で3問扱われた第三次産業に関するものは、追・再試験では2問と、本試験と産業分野とのバランスが取れた作問をお願いしたい。本大問において世界図は使用されず、地図そのものも問5で用いられた日本のものだけであった。

問1 農業の生産性に関する問い。似た傾向を示す国でグループを形成し、各グループにおける農業の特徴を説明した文との組合せ選択の問い。難易度は標準的で、近年の共通テストでは定番の問い方であるが、説明文は付けずに、3か国についてのグラフの判別だけを求める問いとすれば、難易度も下がり解答に要する時間も減少したのではないか。

問2 穀物の用途に関する問いで、燃料用が用途に占める割合で解答できる。問題文や資料の量、麦類とアメリカ合衆国に相当するものを選ぶという問い方の形式まで、コンパクトに収まった印象。食用と競合する用途について考えさせる資料も示唆的で評価できる。

問3 木材の伐採、輸出、輸入に関する知識理解を求める問いで、どの統計集でも掲載されている一般的な統計を用いたという意味で受験者も安心して解けたのではないか。難易度は標準的。

問4 国外からの直接投資と送金に関する問いで、前提として直接投資の意味がつかめている必要があった。本試験に続き、インドの出稼ぎ労働が扱われるという重なりはやや気になった。直接投資と送金という側面からフィリピンやロシアを学習することも多くないと思われ、問題文の冒頭に書かれたことをヒントとするならば、受験者にとっては難易度が高かったか。

問5 日本のサービス産業の都道府県別従業者に関するもの。こうした形式で問う6択問題は、難易度を高く感じさせないわりに、インターネット関連の方が研究開発よりも東京都への偏重が著しいことについて判断を迷い、社会福祉・介護事業は見立てがあっても正答できなかったという受験者が多かったように思われる。

問6 「日本の国土像」との言葉が問題文冒頭にあったものの、内容自体は国土像の構想には至っていなかった点は残念であった。一方で、日本の製造業の業種別立地の推移を、高速道路の分布に関連させて問うという、地理的見方・考え方を生かしての作問については評価が高かった。

第5問 「都市の規模や機能の違いと、それがもたらす課題」 人口都市に関する大問。日本に関するものが3問、日本を含んだ3か国に関するものが1問、ドイツとフランスに関

するものが1問出題され、世界全体を視野に入れた問いは出題されなかった。

問1 3か国の都市圏人口についての問い。都市圏がどこまでの範囲を示すかについての注釈がなかった点については、改善すべきとの声が大きかった。

問2 中心地機能に関する問い。東京都区部との近接性から、横浜市は他都市と比較しても特徴がはっきり出ている。難易度は標準的。

問3 東京都とその周辺3県の住宅に関する主題図の問い。主題図を読み取って、それまでに得た知識をもとに考察する共通テストらしい問いで、難易度は標準的。単身世帯がどの図なのかを判別できたかが鍵だったか。この問いでは共同住宅の注釈があり、ヨーロッパにロシアを含むといった注釈も付けるのであれば、先の問1でもお願いしたかった。

問4 長野県の人口動態を示したグラフを読み取って述べた文の下線部の正誤を判定するもので、丁寧に資料や文章の吟味ができれば正解そのものは容易。

問5 ドイツとフランスの都市機能の集中と分散に関する問いで、誤りの文を選択することは容易。資料としても、両国の違いがはっきりと出ていて示唆的である。一方で、主な中央官庁数の凡例は15と16の二つのみだったり、中央官庁数が1や2などという都市があるのかや、フランスの主な中央官庁数は16でドイツは30であるのかについては判断できなかったりするなど、改善すべき点も残る。

第6問 「北アメリカと中央アメリカ」 北アメリカと中央アメリカという、標準的な地域区分からの出題となった。内容的には、中央アメリカに絞って問われた問3や、キューバについても問われた問5のような難易度の高い問いも見られ、正解率は低い大問となったと思われる。来年度以降は、個々の知識に基づいて判断するのではなく、地域全体に対する概観に基づき、資料をもとに思考・判断することが可能な問いの作成を望みたい。

問1 北アメリカの年降水量に関する問い。始点となる1地点だけでなく、終点となる地点までの降水量の推移や、カナダ西海岸やメキシコを横断する気候が問われていたこともあり、難易度は高い。

問2 アメリカ合衆国とカナダ、メキシコとの国境に関する問い。移民・難民に対する考え方が揺れ動いている世相を反映した出題か。写真も鮮明で正解するのは容易。

問3 中央アメリカの三つの指標に関する組合せ選択の問い。アフリカ系の割合は、ハイチやジャマイカで判別できるが、シとスの判別は該当指標の割合を比較しただけでは困難で、例えばバハマの該当指標に占める割合がそれぞれ極端な点などから消去法的に考えるしかない。農地面積は自然環境からの影響が強く、歴史的背景の違いを作っているとは考えづらいし、第三次産業の割合はアフリカや南アジアを除くと現代においてはどの国も比較的高くなっており、明確な違いを見いだしづらい。社会構造の違いが見られるというテーマと、正解に至るまでに思考判断する内容の関連性が伝わってこず、改善をお願いしたい問いである。

問4 メキシコの自動車産業とカナダのエネルギー資源についての知識理解を問うもので、難易度は低い。

問5 3か国の旅行者に関する問い。インバウンドに占めるヨーロッパの割合が低い2か国がアメリカ合衆国に隣接したカナダとメキシコ、インバウンドに対するアウトバウンドの比率が高い1か国が経済水準の高いカナダと判別すると考えられるが、難易度は高い。カナダ、メキシコ、キューバの3か国の旅行者に関して扱うのであれば、表1からの3か国についての組合せ選択ではなく、表1についての文中の下線部の正誤判定など

の方が適当であったと思われる。

### 3 総評・まとめ・要望

追・再試験においても，豊富な資料と組合せ選択の問いの多さなどにより，本試験と同様，解答に多くの時間を要し，見直す余裕は少なかったと思われる。初見の資料等に向き合い，それまでに身に付けた知識を活用してじっくりと思考判断して正解を得る過程は重要であるが，そうした問いが過度に多くならないよう，全体のバランスに配慮した作問を願いたい。今後もこの問数を維持するのであれば，解答時間が短くすむ問いを増やすなどの対応をお願いしたい。

仮に解答時間を要しても，基礎的な知識を前提に，資料を読み取りながら思考・判断するような問いの作成を継続するのであれば，設問数の検討も必要かと思われる。精選した設問数の中で，じっくりと思考判断するものが作成されることについての異存はない。

世界図を用いた問いは，「地理総合」で3問，第3問で冒頭に3問連続で用いられた『地理総合，地理探究』においても4問に過ぎなかった。現代世界の諸事象を世界的な視点で理解したり，世界を大観する中で地域の特色を考察したりするという視点は重要であり，世界図を提示した中での問題作成の増加が望まれる。共通テストを通じて，地理を選択したことで世界の見方・考え方が深まったと受験者が感じられるような作問を期待する。

新課程の初年度となる今年度の追・再試験が終わり，早速来年度に向けた指導方法の検討が各所で行われていくはずである。地理受験についての特徴などを踏まえながら学習指導を行っていくに当たって，他教科他科目と比較しての得点分布や難易度，上位層の高得点の出しやすさは気になるところである。それらのバラツキが選択した科目間，本試験と追・再試験間で出ないよう，改めて調整をお願いしたい。